# 転生の論理と「転生語り」

## ――三島由紀夫『豊饒の海』について――

奈良﨑　英穂

## 1

転生について語る姿勢には、いくつかの種類があるように思う。例えば全くのフィクションとして語ってみせる場合、あるいは何らかの形の研究として語ってみせる場合など、これまでに様々な語り方がなされてきた。転生（生まれ変わり）について何らかの形で触れているこうした言説（ディスクール）を、今仮に「転生語り」と呼ぶことにしたい。

一口に「転生語り」と言っても、今述べたように、実はそこには様々なレベルがあるのだが、以下においてその代表的な言説を整理しておこう。

（1）フィクションとしての「転生語り」。代表的なものとして、深沢七郎『笛吹川』（中央公論社　一九五八・四）、三島由紀夫『豊饒の海』（新潮社　昭四四・一～四六・二）、遠藤周作『深い河』（講談社　平五・六）などがある。

（2）昔話、伝説、民間伝承といった形で伝えられてきた、あるいは土俗的な伝承形態を残したような「転生語り」。代表的なものとして、平田篤胤「勝五郎再生記聞[1]」（文政六）や松谷みよ子『現代民話考5』（立風書房　一九八六・

二）に収録された話などがある。

（3）仏教哲学や西洋哲学などが、形而上学的に転生を説いてみせる「転生語り」。代表的なものとして、仏教の経典やシュタイナー哲学、またそれらを解説した、石上玄一郎『輪廻と転生――死後の世界の探求』（第三文明社　一九八一・五）、花山勝友『輪廻と解脱――苦界からの脱出』（講談社現代新書　一九八九・六）、渡辺恒夫『輪廻転生を考える死生学のかなたへ』（講談社現代新書　一九九六・五）などがある。

（4）ジャーナリストや超心理学研究者などが、転生者の言説を分析してみせる「転生語り」。代表的なものに、I・スティーブンソン『前世を記憶する20人の子供（新装版）』（今村光一訳　叢文社　昭五五・八）、同『前世を記憶する子供たち』（笠原敏雄訳　日本教文社　平二・二）、S・パスリチャ『生まれ変わりの研究』（笠原敏雄訳　日本教文社　平六・十）、隈元浩彦、堀和世『「死後の世界」研究』（毎日新聞社　一九九七・八）などがある。

（5）右記（1）～（4）やダライ・ラマの転生譚などを組み合わせ、オカルティックな読み物として語ってみせる「転生語り」。代表的なものとして、学研の雑誌『ムー』の特集記事[2]や中岡俊哉『死後の世界を見た――人類永遠の謎！』（二見書房　昭五七・八）などがある。

（6）精神科医や宗教家などが、意図的あるいは非意図的に〈前世の記憶〉を掘り起こしてみせる「転生語り」。代表的なものとして、B・L・ワイス『前世療法　米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』（山川紘矢・亜希子訳　PHP文庫　一九九六・九）、J・アイバーソン『私は前世を見た！』（青木栄一訳　二見書房　昭五二・八）、J・L・ホイットン、J・フィッシャー『輪廻転生　驚くべき現代の神話』（片桐すみ子訳　人文書院　一九八九・七）などがある。

（7）その他の「転生語り」。例えば巷間で語られる「世間話[3]」的なものや、第三者（例えば著述業従事者など）の手を経ないオカルト雑誌の読者投稿欄を賑わす「転生語り」、芸能人などが自分は誰々の転生であると名乗るような類

の「転生語り」など。

むろんこれらは截然と区別できるわけではなく、勝五郎の物語などは（2）から（5）までのいずれにも載っているし、スティーブンソンのあげた事例もあちこちに引用されている。そして転生することを前提として形而上学的な理論を構築している（3）以外において、いずれの分野でも多かれ少なかれ転生者の真贋を問題としているのである。

こうした分類の中で、（1）以外はいずれもが「実際に」あった（あるいはあり得る）ものとして転生を語っているのに対して、（1）は基本的に虚構として転生を語る点において異なっている。作者がそれを信じているか否かはともかく、そこに語られる転生がフィクションであることを、読み手も書き手も当然承知しているのである。そしてそれはある意味で（2）から（7）の集大成でもある。例えば三島由紀夫『豊饒の海』において、脇の下の黒子は（2）に示された民間伝承的なテクストの摂取であろうし、「四有輪転」の理論は仏教哲学からの借り物である。（1）は虚構であるからこそ、今の日本において大凡真面目に論じられることのない、そうした先行するテクストを取り込み得たのだと言えよう。

これら虚構のテクストの中でも、『豊饒の海』は他の作品に比して、転生という現象を読み解かれるべき謎として提示したミステリー的要素の強いテクストではないだろうか。本物か贋物かの議論が活発に交わされてきた過去の経緯を見ても、その謎を読み解いてみせることが、同時に『豊饒の海』の一つの読み方にもなってきたということが言えそうである。

以下においては、『豊饒の海』における転生者たちの真贋に関する謎解きを中心に、転生の論理について考えてみたい。

余談ではあるが、赤坂憲雄が一種の社会現象として読み解いて見せた(4)、オカルト雑誌の読者投稿欄に出没した転生者たちは、未だにその余命を繋いでいるのだろうか。寡聞にしてその行方を知らないが、そうしたオカルト雑誌を代表する学研『ムー』の紙上においては一九九〇年七月号以降二〇〇〇年六月号に至るまで、ほぼ十年間に渡って、転生（生まれ変わり）をテーマとする「総力特集」は組まれなかった。この長いブランクが赤坂の取り上げた、前世を見るために自殺ごっこを演じた少女たちの問題と関わるのかどうかは明らかではないが、社会的な反響も意識して転生の扱いに慎重になったという裏事情があるのかもしれない(5)。

そうしたオカルト側の事情はさておき、次節以降これらの「転生語り」と『豊饒の海』とを比較しながら、転生の論理について考えてみたい。

## 2

これまで『豊饒の海』における転生の問題、とりわけ『天人五衰』の透が本物であるのか否かといった議論は様々に繰り返されてきたが、確かに、研究者であろうとなかろうと、『豊饒の海』を読み終えて転生が本当にあったのか否かといった謎に全く興味を示さなかったとしたならば、その読者は恐らく『豊饒の海』という物語をどこかで読み間違えてしまったとしか考えられない。芽生えた謎をすぐに掻き消してみることはあっても、転生への疑問を全く抱かずにこの物語を読み終えることは至難の業であろう。

圧倒的多数を占める贋物説に対して、透が本物の転生者であることを主張した村松剛の以下の論は、未だその有効性を保っていると言えよう。

透が「過去生」と、もしくは物語の現在とは無関係なイメージと出会ったとき、そのひとつひとつが過去の転生をとげた人びとと符合していることは、作者の明瞭な意図をあらわしているように思われる。（略）／あなたは贋物です、という慶子の断定の声はかん高く、そのことばどおりにうけとっている読者が少なくないと思う。だがこれまで述べて来たように、作者は透に本物としての資格を明確に与えているのである。（村松剛「『天人五衰』の主人公は贋物か」『三島由紀夫全集　第十八巻』付録　新潮社一九七三・七）

村松が根拠として掲げるのは、例えば以下のような箇所である。

そのとき透の望遠鏡は、見るべからざるものを見た。／顎をひらいて苦しむ波の大きな口腔の裡に、ふと別な世界が揺曳したような気がしたのである。透の目が幻影を見る筈はないから、見たものは実在でなければならない。（略）暗い奥処にひらめいた光彩が、別な世界を開顕したのだが、たしかに一度見た場所だというおぼえがあるのは、測り知られぬほど遠い記憶と関わりがあるのかもしれない。過去世というものがあれば、それかもしれない。（『天人五衰』十三）

しかしその一方、本多の仏教哲学に基づく転生説の運用の危うさと、作品中の登場人物たちの誕生日と死亡日のズレとを詳細に検証し、転生に否定的な見解を見せる対馬勝淑のような否定論も根強いものがある。

本多は、「二十歳の死」にしても「黒子の存在」にしても「夢告の実現」にしても、そこに見られる単なる偶然の一致なり類似なりを、自己の意識で勝手に転生の証拠として思いこんでしまったということなのだ。（対馬勝淑「転生の観点から見た『豊饒の海』の悲劇性」『三島由紀夫『豊饒の海』論』海風社一九八八・一）

彼（本多―引用者注）が信じて疑わないが故に執着してきたところの、清顕が転生したとされる人物がまったく偽物であった

こと、そこから彼の人生が無意味な喜劇と化してしまうことの持つ悲劇性において、二重に悲劇なのである。（対馬前掲）

だとするならば、やはり勲も贋物だったのだろうか？

『暁の寺』におけるジン・ジャンについても、透ほどではないが、同様にその真贋が問題とされてきた経緯がある。例えば坊城俊民はジン・ジャンが死ぬ直前に予言を残さないという点を捉え、以下のようにその転生を否定する。

言葉がない、ということは、「夢」が絶えた、ということなのである。／「夢」を失ったジン・ジャンは、すでに「生まれ変わり」とはいえないのである。ジン・ジャンは、形骸、たんなる肉体にすぎなかった。このことは、例の証拠の黒子が、幼少のジン・ジャンには無く、成人したジン・ジャンにあった、という事実にも関連してくる。（坊城俊民『焔の幻影』角川書店一九七一・十一）

また『天人五衰』において、慶子が透を贋物とやりこめた時の慶子の主張を通して、佐藤秀明もジン・ジャンが贋物である可能性を指摘する。

ここから考えられることはただ一つ、慶子は、ジン・ジャンが勲の生まれ変わりだと結論づけた本多の知らないジン・ジャンについて知っているということ。もっとはっきり言うならば、ジン・ジャン自体が「贋物」であると、慶子が知っているということである。そして慶子にも判断できる真贋の基準とは、輪廻転生のいくつかの条件の中でも死の年齢しかない。彼女が透の「贋物」性を言うのに年齢を最大の根拠としたのは、常人である自分でも確かめられるということでもあろうが、既に慶子自身が確認していることがあったのではないか――。（佐藤秀明「「贋物」の主人公――『豊饒の海』論序説――」『昭和文学研究』昭六三・七）

鈴木貞美は月光姫の死を告げた姉の存在そのものを疑ってかかる。

本多にジン・ジャンの死を告げた双子の姉は、もしかしたら過去を隠そうとするジン・ジャンその人だったのかも知れない。そう思わせるように文章が書かれている（鈴木貞美「三島由紀夫　豊饒の海・空無への意志」『国文学』一九八八・三　臨時増刊）

しかし、年齢の問題が必ずしも転生者の真贋に結びつくものでないことは、すでに指摘した⑹通りである。姉の存在については、本多の帰国の日に「私とよく似たお人形」の「お姉様」がいる、と一応伏線が張られており、また『天人五衰』においてこの姉に月光姫の死について問い合わせている（返事は得られないが）のだから、本当の姉であった可能性は否定できない。

転生者たち、特に月光姫と透が本物であるのか否かという議論は、永遠に決着の付くような問題ではないとも言える。しかしその問題にどこかで決着を付けようという意志が、いつの時代にも働いてきたこともまた、これらの先行研究が示している事実である。

それにしても、長年研究を続けてきた高名な研究者たちが、この問題に関して、意見をこうも異にするのは何故なのだろう？　それは彼らが二つ（あるいは三つ）の論理に沿って働く転生の条件を混同してしまっているからだとしか考えられない。『豊饒の海』における転生の解釈には、レベルの異なる三つの論理が働いているのであり、どの立場に拠るかによって解釈は異なってしまうのだと言えよう。

以下においてはこの転生の論理について考察していきたい。

## 3

『豊饒の海』において主人公たちの転生を見届けるのは、語り手を除くならば本多繁邦ただ一人である。その本多が勲を清顕の転生者と認める部分を先ず確認しておきたい。

これに見習って滝へ近づいた本多は、ふと少年の左の脇腹のところへ目をやった。そして左の乳首より外側の、ふだんは上膊に隠されている部分に、集まっている三つの小さな黒子をはっきりと見た。／本多は戦慄して、笑っている水の中の少年の凛々しい顔を眺めた。水にしかめた眉の下に、頻繁にしばたたく目がこちらを見ていた。／本多は清顕の別れの言葉を思い出していたのである。／「又、会うぜ。きっと会う。滝の下で」（『奔馬』五）

本多はこの夜、かつて読んだ仏書の四有輪転についての件りを思い起こす。勲が清顕の死から数えて転生の年齢に合致することを確認し、この「神秘は、それ自体の合理性」を備えているという考えに取り憑かれるのである。ここで本多は「中有の期間は短くて七日間、長くて七七日間で、次の生に託胎するとして、飯沼少年の誕生日は不詳ながら、大正三年の清顕の死の日から、七日後乃至七七日後に生まれたということはありうることだ」（『奔馬』六）と推論するのであるが、後述のようなテクスト外の転生の論理に照らしてみれば、必ずしも「七日後乃至七七日後」に生まれ変わるとは限らない（むしろそうでないことの方が多い）ことが分かるだろう。この点に関しては後でもう一度触れたい。

「神秘」に取り憑かれた本多は、次の転生者ジン・ジャンにも証拠を求める。菱川から「物心ついてからそのお姫様は、自分は実はタイ王室の姫君ではない、日本人の生れ変りで、自分の本当の故郷は日本だ、と言い出されて、誰が何と言おうとも、その主張を枉げようとされない」（『暁の寺』一）との話を聞かされた本多は、清顕の遺した夢日記を取り出し、彼がシャムの王族になった夢を確かめる。もはや本多は「清顕の夢の証しを信ぜずにはいられ」ず、何も語らなかった勲についても「熱帯の女の夢を見たことがあったかもしれない」と手前勝手な証拠の補強を行う。もちろん本多は月光姫にその証拠を確かめずにはいられない。

「松枝清顕が私と、松枝邸の中ノ島にいて、月修寺門跡の御出でを知ったのは、何年何月のことか、おたずねしたい」（略）／「一九一二年の十月です」／本多は心中おどろいたが、果して姫のお心の中に、すでに過ぎた二つの前世の物語が、あたかも小さな密画の絵巻のように、そのままの形で詳さに録されているのかどうかは定かでなかった。（略）／「飯沼勲が逮捕された年月日は？」／姫はますます眠そうに見えたが、澱みなくこう答えた。／「一九三二年の十二月一日です」（『暁の寺』三）

こうして転生者としての根拠の一覧を作り上げていった本多にとって、ぼんやりと遠景に見入る月光姫の瞳は「この世界の裂け目を凝視してい」ることになる。勲と月光姫を経て、本多は自ら転生の論理を創り上げたのであった。

さてここで、転生の証拠として本多が採用する条件と、各転生者がこれらの条件をどれだけ満たしているかを一覧してみよう。

表1

| | 勲 | 月光姫 | 透 |
|---|---|---|---|
| （ア）脇（腋）の下の黒子の存在 | ○ | ○ | ○ |
| （イ）死の直前になされる予言の実現 | ○ | ○ | |
| （ウ）「四有輪転」に基づく転生の年齢の一致 | ○ | ○ | ○ |
| （エ）清顕の夢日記にある言葉の実現 | ○ | ○ | |
| （オ）前世の記憶 | ＊ | ○ | ＊ |
| （カ）二十歳の死 | ○ | ○ | |

（＊勲や透が前世の記憶を持っているかどうかを、本多は知らない）

こうしてみる限り、透は確かに贋物くさい。しかし絶対に贋物であるとも言い切れない。物語の一登場人物にすぎない本多ではなく、『豊饒の海』の語り手の論理に従うならば、彼らは皆転生者である可能性を持っているのである。

しかしもし彼らが転生者であるのなら、三島が、あるいは語り手がそれによって示して見せようとしたのは、何であったのだろうか？　それを近代の日本そのものの象徴であると言うことは容易いが、そうであるならば、尚のこと三島における天皇の問題も含めて考えてみることが必要であろう。

## 4

生まれ変わりの物語は、我々日本人にとってさほど馴染みの薄いものではない。日本の転生譚でよく知られているのは、松浦静山の『甲子夜話』中の一話や平田篤胤の「勝五郎再生記聞」、小泉八雲「勝五郎の転生」として語られてきたものであろう。これは、武蔵の国中野村に生まれた勝五郎があるとき、自分は生まれる前は程窪村の久兵衛の

子であったと話し出し、翌年母に伴われてその地を訪ねて偽りではないことが判った、というものである。類似の転生譚は日本人ならお馴染みのものであろうし、生まれた子供の体の一部に字が書いてあったり、見覚えのある痣があったりといったことから、ある人物の生まれ変わりだと言われた、といった話も一度ならず耳にしたことがあろう。

海外ではI・スティーブンソンの一連の研究が有名だが、赤坂憲雄がスティーブンソンの研究で扱われている転生の五つの特徴を簡潔に纏めている(7)ので、先ずここでそれを参照しておきたい。

（1）予言――ひとりの人物Aが、死後にもう一度この世に生まれ変わると予言するところから始まる。
（2）予告夢――その人物Aの死後、ほかのだれかBが、ある家族のもとにAが生まれ変わる夢を見る。
（3）スティグマ――生まれてきた子どもCには、故人Aの身体についていた傷などと一致する母斑や先天的な欠損がある。
（4）物語り――子どもCは口がきけるようになると間もなく、Aの生涯をはじめは断片的に、しだいに詳細に物語るようになる。
（5）奇行――子どもCがAの示した行動と符合するような、風変わりなふる舞いをすることを、情報提供者Dが証言する。

この特徴に当てはめて考えるなら、実は清顕にしろ勲にしろ、明確な形では予言を残していないことになる。彼らの残した言葉が来世の予言であったかどうかは、次の生を迎えたときに初めて事後的に確認される性質のものであるからだ。その意味で『豊饒の海』における予言は、厳密さを欠いた、受け取る側の解釈で如何様にも捉え得る性質のものでしかない。また（2）のような形での第三者による「予告夢」は、『豊饒の海』には語られない。同様に（5）の情報提供者Dのような第三者は、本多の関知している範囲では『暁の寺』第一部の菱川のみであり、他には存在しないことになる。本多はスティーブンソンによって示された典型例に見られる情報提供者を、あのいい加減な通訳で場を混乱させる菱川のみしか与えられないのである。

ところで赤坂憲雄は、このうち記憶に関わる特徴について、第一、五～八歳頃に前世の記憶を喪失する、第二、前世の記憶が現れるのは覚醒状態の時である、第三、その記憶は前世での最後の日の近辺で起こった出来事に集中する、第四、前世と異なる社会階層におかれている場合、その階層にそぐわない変わった行動を示す、といった特徴を付け加えている。

これらも加えて、『豊饒の海』がこのテクスト外部の転生の特徴にどれほど一致するかを確認しておきたい。

先ず（1）予言はここに指摘されたような明確な形ではなく、本多がそう認知するレベルでなされる。これに関わるのは予言する人物であるよりも、むしろ予言された人間の方である。いくら予言を残しても生まれ変わらなければ、それは予言でも何でもないのだから。そうしてみると清顕の予言は勲に成就し、勲の予言は月光姫に成就することになり、この両者はこの一つ目の条件を満たしているといえる。

次に（2）の予告夢は、外部の論理とは異なり、テクスト内では転生する当人が見、語り手がそれを語ってみせるという形を取る。これも夢を見る当人よりもむしろ見られる側に関わる問題であり、勲と月光姫はこの条件を満たしている。ただし『豊饒の海』の場合清顕の夢日記の存在も考慮する必要があろう。

（3）スティグマに関しては月光姫の場合但し書きが必要となるが、一応全転生者が該当する。

（4）の物語り（5）の奇行、また赤坂の指摘する第一と第四に該当するのは月光姫だけである。

赤坂の第二は月光姫については言うまでもあるまい。勲や透の場合、はっきりと前世の記憶だと意識されるわけではないが、覚醒時に記憶らしきものを再現しているのは間違いない。以上の転生の条件を『豊饒の海』に当てはめてみたのが、次の表である。

表2

| | 勲 | 月光姫 | 透 |
|---|---|---|---|
| (1) 予言 | ○ | ○ | |
| (2) 予告夢 | ○ | ○ | |
| (3) スティグマ | ○ | ○ | ○ |
| (4) 物語り | | ○ | |
| (5) 奇行 | | ○ | |
| 第一　記憶の喪失 | | ○ | |
| 第二　覚醒状態 | ○ | ○ | ○ |
| 第三　最後の日 | | | |
| 第四　社会階層 | | ○ | |

こうしてみると、月光姫は表1に示した本多の論理に照らしても、表2の外部の論理に照らしても、転生者の中では最も多くの条件を満たしていることになる。では月光姫が勲よりもより本物らしいのかということになると、恐らく誰もが首肯しかねるに違いない。これだけの条件を満たしているのに、何故そう感じるのだろうか。

それは肉体的痕跡の客観性の欠如に加えて、月光姫の転生の語られ方の特異性にかかっているのだと言えよう。勲や透の前世の記憶は語り手によって語られる、つまりメタテクストのレベルにおいては事実であるのに対して、月光姫の転生の記憶は全て菱川を介して語られたのものであった。七歳の月光姫と本多とのコミュニケーションは閉ざされており、十八歳の月光姫は日本語を操りはするものの、転生の記憶については一切語らない。二十歳の死も、双子の姉から十五年の後に語られるのであり、しかも『天人五衰』において結局はその死を確認できないままに終わってしまうのである。これら二つの転生の証拠は他者の言説を通過したものであり、そこに他者の意図的歪曲が加えられ

る可能性も排除できないような証拠でしかない。例えば菱川の次のような通訳を見るならば、彼がどれほど真面目に本多と月光姫との意志疎通を図ったかは、全くもって疑わしいものとならざるを得ない。

「先生がさっき、『インドから飛行機で帰りたかったが、軍用機で、座席がとれなくて』とお姫様にお話になったでしょう」／（略）「それを私が訳しまちがえて、ついそこへ本音が出て、『これから日本へ飛行機で帰るが、軍用機で、あなたの分の座席まではとれないから、つれて行くわけには行かない』と訳してしまったのです。（略）いやはや、私の不調法で、お詫びの申上げようもございません」／と菱川は涼しい顔で言訳をした。（『暁の寺』十一）

何の含むところもなしにこれだけ複雑な言い間違いができるとは到底考えられないが、万事この調子で、菱川は本多と月光姫の間に交わされるコミュニケーションに、何らかの意図的あるいは非意図的歪曲を加えた可能性は全く否定できないし、肝心の月光姫の記憶は長じて後、消え去ってしまうことになる。月光姫の姉と名乗る女性の言葉にしても、『天人五衰』において結局一度も確認を取れないままに終わってしまう。こうしてみるならば、肉体的痕跡も前世の記憶も二十歳の死も確かに持ち合わせたとは言い難い月光姫は、あるいは透以上に贋物臭い存在であったかもしれない。

しかしテクスト外部の一般的な「転生語り」の論理に照らしてみる時、テクスト内部では転生の曖昧さを露呈してしまうこうしたマイナス点は、全てプラス方向へ作用する。（5）の「奇行」の情報提供者に相当する菱川という転生の証言者を持ち、赤坂が指摘する第一の特徴、幼い頃に記憶が消えてしまうという項目にも該当するのである。

つまり月光姫はテクスト内部の論理においては、極めて曖昧な転生の証拠しか持ち得ていないが、一般的な「転生語り」の論理においては、勲や透に比較して殊更典型をなぞるような証拠を踏襲しているのである。そして何より重

要なのは、一般的な「転生語り」の論理では全て転生者である本人自身が自分が誰かの生まれ変わりであることを主張しているのに対して、『豊饒の海』においては、月光姫以外誰も自分が生まれ変わりであることを主張してはおらず、本多だけが登場人物たちの転生を認めているという点である。

このことは何を意味しているのだろうか？　それは『暁の寺』第一部の月光姫の存在が、あるいはその生まれ変わりの語られ方が、異質なものであることを意味しているのではなかろうか？　そしてその異質さをもたらす大部分に菱川が荷担しているのである。菱川について検討する余裕はないが、この男の存在が月光姫の転生にある種の客観性をもたらしているのは事実である。菱川は『豊饒の海』の転生をテクスト外の一般的な「転生語り」へと接続する役割を果たしていると言えよう。

本多が採用した転生の論理とここで示したテクスト外の転生の特徴とを比較してみると、多少の留保条件を付けねばならないものの、脇の下の黒子＝スティグマ、予言、夢、前世の記憶という四つの証拠が共通している。

それに対し、「中有」の間に次の転生者に生まれ変わるという条件、それに付随する二十歳の死という条件は、一般的な「転生語り」における証拠としては掲げられていない。

『豊饒の海』とりわけ『暁の寺』は、テクスト外のオカルティックな奇現象としての「転生語り」や仏教哲学の「転生語り」を巧みに取り入れながら成り立つ世俗的な一面を持ったテクストなのである。

## 5

幼少時には前世の記憶を語って見せた月光姫であったが、十八歳になって日本を訪れた月光姫は、前世の記憶も含

めて幼い頃の記憶を全て失っている。本多が清顕の夢日記に基づき転生の証拠の品として贈った指輪は、月光姫にとっては慶子の写った写真より遙かに無価値なものとして燃えさかる別荘に平然と置き去りにされることになる。そして間もなく月光姫は日本を去り、帰国後は消息を絶ってしまう。月光姫が二十歳で死んだことを本多が知らされるのは、その十五年後である。当然月光姫は本多の知りうる範囲では予言は残さない。この点を捉え、先の坊城俊民のような月光姫＝非転生者説が生まれてくるわけである。透のみならず月光姫、あるいは勲までもが転生者としては贋物だったとする説があるのは先に紹介した通りである。しかし本当に彼らは贋物だったのだろうか？

例えば証拠としての予言の問題を取り上げてみよう。清顕や勲は確かに僅かな予言を本多に残しはしたが、本多の知り得ぬ情報はそれ以外にも沢山あった。その事を知っているのは、本多であるよりもむしろ語り手であり、我々読者であるのだ。つまり我々は、本多が採用してみせるのとは異なった転生の論理を、テクストに読み取ることも可能であるということだ。予言によって真贋が問題とされるのは、前述の通り、予言を残す当人よりも生まれ変わってくる転生者の方である。その点で清顕の予言の通り勲は生まれ変わり、勲の予言の通り月光姫は生まれ変わったのだから、こうした論理に従えば彼らは転生者だということになる。

ところで月光姫は本当に予言を残さなかったのだろうか？　確かに月光姫本人から次なる転生への確たる言葉を得ることは、本多のみならず、我々読者にも叶わぬことであった。

しかし、月光姫は姉と名乗る女性の言葉に従うならば、随分奇妙な死を迎えている。この点を今一度考えてみる必要があろう。

侍女の話では、ジン・ジャンは一人で庭へ出ていた。真紅に煙る花をつけた鳳凰木の樹下にいた。誰も庭にはいなかった筈

なのに、そのあたりから、ジン・ジャンの笑う声がきこえた。遠くこれを聴いた侍女は、姫が一人で笑っているのをおかしく思った。それは澄んだ幼ならしい笑い声で、青い日ざかり空の下に弾けた。笑いが止んで、やや間があって、鋭い悲鳴に変った。侍女が駆けつけたとき、ジン・ジャンはコブラに腿を咬まれて倒れていた。（『暁の寺』四十五）

姉によって語られる月光姫の死の挿話は、単に月光姫が死んだという事実を伝えているのではない。毒蛇に咬まれて死ぬ最後は、既に勲の夢に予感されていた。更に勲は別の夢で、女に変身し、その女を見ながら射精して目覚め、「涜した自分の内に、世界が裏返ったような先程のふしぎな感覚」（『奔馬』三十三）を味わうことになる。「世界が裏返った」とは将に転生を、それも異性への転生を指しているとも捉えられるが、こうして本多の知り得ぬ勲の夢を辿ってみるなら、月光姫はその死までを勲によって予感されていた、あるいは語り手によって予言されていたと言うことができよう。

ところで、月光姫が死の直前に上げた笑い声は、何を意味していたのだろう。あらゆることに周到である語り手が、死の直前においてなされた笑いを全く無意味に語って見せたとは考えがたい。ジン・ジャンの死が予言されていた、即ち転生であったと判断するとき、月光姫が上げた最後の笑い声とは、生まれ変わった来世を垣間見た喜びの声であったと、つまりこの笑い声こそが一種の予言であったとは考えられないだろうか。それに続く悲鳴は、コブラに咬まれた際に上げたものと捉えるのがもちろん妥当ではあろうが、笑い声と悲鳴の間にあった僅かな時間に、月光姫は既にコブラに咬まれていたと考えることも不可能ではない。とするなら、この悲鳴とは、毒蛇に咬まれた時の悲鳴であるというよりも、まさに死を迎えつつあった瞬間に次なる転生者の忌まわしい未来を覗いてしまった悲しみの声であったのかも知れない。少なくともテクストには、悲鳴がコブラに咬まれた際のものであると語られてはいないの

である。笑い声と悲鳴がジン・ジャンの最後のメッセージであったとするのは穿ち過ぎであるのかも知れないが、最後の笑いと悲鳴がわざわざ語られた事実に一つの意味を当てはめて見ることもあながち無意味ではないように思える。

こうした読みを重ねてみると、我々は本多が採用した転生の条件とは別に、語り手によって示された転生の論理を措定してみることが可能だということに気が付く。このレベルにおいては本多の採用した「四有輪転」に基づく出生日や脇腹の黒子の存在、二十歳の死といった証拠は問題とならない。語り手はそれらを転生の証拠としては提示していないからだ。それに代わって語り手が示してみせるのは、（あ）清顕の夢日記の実現、（い）前世者の死の直前の予言、（う）前世の記憶、（え）嫌悪する者への転生、（お）転生を証言する第三者の存在、という転生の論理である。

例えば（う）前世の記憶に関して、月光姫の場合は菱川の口を通してのみだが、透には前述のような記憶があり、勲に関しては次のような記憶が語られる。

> 脱衣で全身が鳥肌立ったとき、彼は身の置き所もない寒気の鞭打ちの間にひらめく、朱と青の華やかな幻を見た。（『奔馬』三十三）

これを清顕の経験した次のような場面と突き合わせてみるならば、勲の幻が彼が推測したように彫師の言葉によって触発された牡丹と唐獅子の色彩から喚起されただけの幻影でないことが理解できよう。

> その間も悪寒はたえず、鋭い銀の矢のように背筋を射た。／道のべの羊歯、藪柑子の赤い実、風にさやぐ松の葉末……（『春

の雪』五十二）

その身に感じる寒さによって前世の記憶が触発されたのだと言うことも、充分可能であろう。これ以外にも既に指摘されているように、勲はかつて清顕が聡子との逢い引きに利用した北崎の下宿屋に間借りする堀中尉を訪ねた際に「一度たしかにここへ来たことがあるという感銘」（『奔馬』十一）を抱くのである。

（え）の嫌悪する者への転生という点に関しては、清顕はその生前嫌った剣道部員の飯沼勲に、勲は女である月光姫に、月光姫はあれほど毛嫌いした本多繁邦によく似た透に転生するのである。

（お）の転生を証言する第三者の存在としては、勲の場合裁判で証言して見せた北崎老人がそれに当たるし、月光姫の場合には菱川の情報源になった人間の存在が挙げられる。

これらを一覧すると表3のようになる。

表3

| | 勲 | 月光姫 | 透 |
|---|---|---|---|
| （あ）清顕の夢日記の実現 | ○ | ○ | |
| （い）前世者の死の直前の予言 | ○ | ○ | ○ |
| （う）前世の記憶 | ○ | ○ | ○ |
| （え）嫌悪する者への転生 | ○ | ○ | ○ |
| （お）転生を証言する第三者の存在 | ○ | ○ | |

以上見てきたように『豊饒の海』の転生は、本多が証拠として採用する転生の論理（表1）、テクスト外の「転生

語り」の論理（表2）、語り手によって示される転生の論理（表3）という三つの論理に従って考えることが可能である。この三つを並べてみると、月光姫は最もよく転生者の特徴に合致し、透は最も贋物臭いということになる。黒子や前世の記憶などの重なりを省いた上でこれを整理し数値化してみると、勲は十五項目中十項目を満たし、月光姫は同じく十四、透は五となり、月光姫の本物っぽさは際立っている。

しかしそのような乱暴な括り方は混乱を招く元であるのかも知れない。本田には本田の論理があったが、また語り手は本田の論理とは異なる転生の証拠を提示しているのであり、更に読者はそれらに加えて表2のようなテクスト外の論理を当てはめて読み解くことも可能なのである。転生の真か偽かを追い求めるあまり転生に振り回され、たどり着いてみれば「記憶もなければ何もない」（『天人五衰』三十）空虚さの中に放り出されるのだとするならば、我々はせいぜいこうして転生の可能性を数字にして弄ぶにとどめておくべきなのかもしれない。合致する項目の多寡をもって真贋を決定するのではなく、いずれの転生者も多かれ少なかれ転生の論理に従っているのであってみれば、結局は読者が自ら読みたい物語を紡ぐしかないのであろう。

注(1)　岩波文庫『仙境異聞・勝五郎再生記聞』（二〇〇〇・一）に拠る。

(2)　学研『ムー』で特集された転生関連の「総力特集」記事（一九九九年十一月号別冊付録2「ムー」全目次集」及び二〇一九年十一月号別冊特別付録「総力特集の40年史」に拠る）としては以下のようなものがある。

・一九八一年七月号「転生の謎」斎藤守弘・島大蔵・多田光邦・中沢康成

・一九八六年八月号「生まれ変わり（転生）の証明」島大蔵

・一九九〇年七月号「生まれ変わり＝転生の謎を解く!!」藤島啓章

・二〇〇〇年六月号「徹底検証!!　「生まれ変わり」の謎」志水一夫

・二〇〇六年三月号「実録!!　「生まれ変わり」の謎」小原田泰久

・二〇一八年三月号「生まれ変わりの遺伝子「ソウルゲノム」の謎」南山宏
・二〇一八年五月号「転生と臨死体験の謎を解く「中間生」の秘密」文月ゆう

(3) ここで言う「世間話」とは、「あくまでも耳から耳へと密かに囁かれる情報の一種」が「世間に開放、あるいは解放されて、さまざまに取沙汰され」(野村純一『日本の世間話』(東京書籍一九九五・二)たものを指す。

(4) 赤坂憲雄「前世夢紡ぎ—少女たちの共犯幻想!」(『別冊宝島114 いまどきの神サマ』一九九〇・七)

(5) 例えば浅羽通明は、これに先立つ一九八八年五月号の『ムー』編集作業中に、文通欄に寄せられた転生仲間を求める大量の投稿に「気味が悪くなった編集部」が「急遽ゲラを差し替え、普通の葉書中心の文通欄にまとめ直した」事実を指摘している。(「オカルト雑誌を恐怖に震わせた謎の投稿少女たち!」『別冊宝島92 うわさの本』一九八九・四)

(6) 奈良﨑英穂「『豊饒の海』における主人公たちの年齢について」(『日本文芸研究』第五二巻第四号 二〇〇一・三)

(7) 注(4)に同じ。

・本文引用は新潮文庫『豊饒の海(一)〜(四)』(昭五二・七〜一一)に拠る。

(ならさき ひでほ・関西学院大学非常勤講師)